

Title	1920年代東京における国際主義とアジア主義の交錯：エスペラント・神智学・バハイ：付・英国のエージェントH・P・シャストリの孫文面会記とその翻訳
Author(s)	橋本, 順光
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2023, 63, p. 145-166
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/91244
rights	
Note	

Osaka University Knowledge Archive : OUKA

<https://ir.library.osaka-u.ac.jp/>

Osaka University

1920年代東京における国際主義とアジア主義の交錯

エスペラント・神智学・バハイ

付・英国のエージェント H・P・シャストリの孫文面会記とその翻訳

橋本 順光

1 エロシェンコのロシア アジアとヨーロッパのあいだ

秋田雨雀の戯曲「颱風前後」(1919)は、親交のあったウクライナ出身の詩人エロシェンコの登場からはじまる。舞台は、1916年頃の東京という設定である。エロシェンコは故郷の麦刈の唄をバラライカで演奏し、秋田自身を思わせる「芸術家」の太田から、故郷へ帰りたくないかどうかを聞かれる。するとその「盲青年」は、「私はロシア人を人間として愛します。然し今のロシアを愛しません」という理由で¹⁾、帰るつもりはないことをきっぱりと告げ、以下のように故国の困難な行く末について述べる。

「ロシアは昔から大きな荷物を背負っています。それは何んだと思います？ 一つはヨーロッパで、一つは亜細亜です。中々大きな荷物です。片方が頭を持ち上げる時は、片方は倒すでしょう。また片方が頭を持ち上げると片方はまた倒すでしょう。何時まで進んでも同じことです。ロシアはいま外国と戦争する時を持っていません。ロシアは自分で自分と戦争するので充分です。」²⁾

当時の読者は、この戦争は第一次世界大戦を指し、こうした状況から翌1917年にロシアで革命が起きたことを容易に想起したことだろう。ただし、この題名にもなっている「颱風」は、単に異国ロシアの革命だけではなく、同様の困難が舞台となる日本にも共有されていることをも示唆しているように思われる。それを裏書するように、このセリフをうけて太田は、「その点では何処の国でも同じことです。戦争をしている暇なぞのあるべき筈がありません」と答えるのである。第一次世界大戦が曲がりなりにも終結した1919年に、この戯曲は、ロシ

1) 「颱風前後」は、『早稲田文学』1919年5月号に掲載後、『仏陀と幼児の死』(叢文閣、1920)に掲載された。引用は同書、p.31.

2) 秋田雨雀『仏陀と幼児の死』、p.32.

ア同様に、ヨーロッパとアジアの間で揺れ動く事態を棚上げにしたまま、「戦争」に従事する日本の姿を示唆しているのとらえることも可能だろう。事実、一次大戦後の日本では、ヨーロッパとの協調を志向する国際主義と、東洋の連携と帝國的統合を志向するアジア主義という相反する文化運動が、呉越同舟ともいべき形で同居していることがしばしばであった。

例えば国際共通語として人工言語のエスペラントを推奨する運動は、言語の帝国主義を否定し、平等を志向するゆえに、社会主義運動と親和性が高かった³⁾。例えばコスモ倶楽部(1920-23)は、「日本の社会主義者と民主主義者、および朝鮮と中国の留学生ナショナリストの交流を主目的とする国際的組織」の隠れ蓑であった⁴⁾。同様に、宗教間に優劣をつけることなく、それぞれの宗教は個別の表現や方法で同じ真理に近づこうとしていると考えるバハイ教や神智学協会は、しばしば反植民地主義運動と結びついた。例えば神智学協会はオカルティズムと地続きである一方、アジア主義者も呼び寄せていた。これらの団体は、微妙に方向や力点を異にしており、その人脈も複雑に重なりあい、時に対立しあっていた⁵⁾。現にエロシェンコと秋田は共にエスペラントを学び、バハイの集会に出ていたが、神智学協会からは距離を置いていた。その一方で、二人は、英国当局に雇われたエージェントで早稲田大学のギターソサイチー講師だったH・P・シャストリにそれぞれ目をつけられ、内偵されている⁶⁾。本稿では、そんな国際主義とアジア主義の相克する神智学やバハイ、そしてエスペラントに関して、中間報告としていくつかの事例を列挙し、その連鎖と変容について点描してみることにしたい。

2 エスペラント語と国際主義

コスモ倶楽部の会員で、発足にも深く関わっていたと推測される吉野作造は⁷⁾、エスペラントの最初期の紹介者でもあった。そのことは吉野自身が、石井研堂の『明治事物起源』

-
- 3) よく知られているように、1928年に結成された全日本無産者芸術連盟は、エスペラント語の略称NAPFがしばしば使用された。
 - 4) コスモ倶楽部は、人類の融和と友愛というコスモポリタニズムを標榜し、エスペラント語の規約も掲げていた。エロシェンコも会員であったが、発起人の一人権熙国は日本の官憲に情報を流していた可能性が示唆されている。詳しくは、松尾尊兌「コスモ倶楽部小史」『大正デモクラシー期の政治と社会』(みすず書房, 2014)を参照。
 - 5) 詳しくはHans Martin Krämer, Julian Strube (eds.), *Theosophy across Boundaries: Transcultural and Interdisciplinary Perspectives on a Modern Esoteric Movement* (Albany: SUNY Press, 2020)を参照。
 - 6) 詳しくは橋本順光「シャストリの英国エージェントH・P・シャストリの諜報活動: 東京・上海・ロンドンで活躍した「情報ブローカー」付・インドで押収された大川周明の英文書簡とその翻訳」『大阪大学大学院文学研究科紀要』60(2020)を参照。その後、1918年に東京から上海へ渡ったシャストリが、孫文と接触したことを示す資料を発見できたため、本文と和訳とを末尾に付した。
 - 7) 松尾尊兌『大正デモクラシー期の政治と社会』, p.420.

(1926) のエスペラントの項目に触れて、それ以前の1903年5月号の『新人』に紹介記事を書いたと記しているのである。そのなかで吉野は、W・T・ステッドが編集する英国の雑誌『評論の評論』にエスペラントを推奨する記事が多数掲載されており、それを参考にしたのだという⁸⁾。吉野が書いたと称する「世界普通語エスペラントー」は、無記名ではあるが、以下のようにハーグの国際法廷の係争事件から始まっている⁹⁾。それによれば、ラテン語が公用のカトリック教会の財産について、英語を話すアメリカとスペイン語を使うメキシコが争ったのに対し、デンリッシュ語を話す判事長の下、判事が使う言葉もオランダ語、英語、ロシア語とばらばらなうえ、法律顧問はフランス語を話すベルギー人なのだという。そこから国際共通語が必要なことを説き、今度ロンドンで開催予定の自転車愛好家の国際クラブが、エスペラント語を採用するのは間違いないだろうと記事は続けている。

吉野は正確な書誌を忘れたと記しているが、時期と内容から考えておそらくは1902年10月号の『評論の評論』にある「求む国際語！」を参考にしたと思われる¹⁰⁾。ただし『評論の評論』では、自転車の国際クラブはイタリア語か英語か、共通語を決める見通しというだけで、エスペラントについてはまったく言及されていない。おそらくはエスペラントの理想と意義とを強調するあまり、あたかも広まっているかのように誇張してしまったのだろう。その点で見逃せないのは、ハーグ法廷とサイクリング倶楽部の記述の間にある一節である。英国は島国なうえ、「われわれは遠くかつ広く世界を植民地にし、船が海のすみずみまで行き渡っているので、世界の大部分で英語は大変実用的な国際語になっている」ので、国際語の必要性を感じにくいというのである。

この吉野が紹介しなかった一節は、当時、エスペラント語に込められていた彷彿とさせることだろう。世界の大部分がヨーロッパに征服されていた当時において、共通語としていずれの言語を使用するにしても、その使用は否応なく帝国の拡大と結び付けられ、植民地化が連想されたことがうかがえる。ちょうどM・K・ガンディーが、『ヒンドゥー・スワラージ』(1909)で、英国から自治独立を勝ち取ろうと議論するにしても、インド人は英語を共通語としなければならない皮肉を嘆いたのは、ほぼ同時代のことである¹¹⁾。それだけにエスペラント語は、植民地と宗主国という支配関係を再生産せずに、平等に意思疎通を図る格好の道具とみなされたと思しい。吉野も、それこそ後のコスモ倶楽部のように、東アジアの留学生との共通語として適していると考えたのかもしれない。

8) 吉野作造『主張と閑談』(文化生活研究会, 1927), p.182.

9) 「世界普通語」『新人』1903年5月号, pp.36-7.

10) "Wanted: An International Language! A Plea for the Study of Esperanto", *Review of the Reviews*, 26 (1902), p.384.

11) 詳しくは橋本順光「グローバリゼーション—世界を呑み込む万国博覧会」, 喜多千草編著『20世紀の社会と文化』(ミネルヴァ書房, 近刊予定)を参照。

吉野が回顧したように、20世紀初頭の『評論の評論』には、主筆のW・T・ステッドがしばしばエスペラント語を推奨する記事を執筆していた。これはステッドが、平和運動とスピリチュアリズムの双方において熱心な活動家であったことと、無関係ではあるまい。それこそ心霊の世界では、あらゆる言語の障壁はとりのぞかれ、容易に意思疎通できると考えられており、エスペラント語はそんな理想に近づく方便とみなされたことは想像に難くない。

なおステッドは、神智学の教義を受け入れることはなかったが、神智学協会を創設した中心人物であるブラヴァツキー夫人と親しく、その主著である『シークレット・ドクトリン』(1888)について、友人である社会主義者のアニー・ベサントに書評を依頼している。この1889年に掲載された書評が縁となり、ベサントは、神智学に強く惹かれるようになり、ついにはブラヴァツキーの後を継いでインドに本部を置く神智学協会の2代目会長にまで上り詰めることになった¹²⁾。そしてこのベサントから指示を受けて、1919年に訪日して神智学協会の東京支部を創設したのが、詩人のジェイムズ・カズンズである。

3 神智学と久米民十郎 稲・プリנקリーとの交叉

カズンズは、慶應義塾大学で英文学を教えるかたわら、柳宗悦やバーナード・リーチ、それにポール・リシャールなど、神秘思想に近く、おそらくは神智学協会に引き込むに足る影響力の大きな人物たちに積極的に接触していった¹³⁾。その滞在は1919年から翌年にかけての一年足らずの短いものであるにもかかわらず、当初の目的通り、カズンズは神智学協会の東京支部を創設し、洋画家の久米民十郎、陶芸家のグルチャラン・シン、そして鈴木大拙やジャック・プリנקリーらを会員とすることに成功した¹⁴⁾。神智学への関与についての濃淡は当然ながら、それぞれ異なっており、理念への賛同もさることながら、社交や人脈のためという側面は決して無視できるものではないだろう¹⁵⁾。

12) Stewart Jay Brown, *W. T. Stead: Nonconformist and Newspaper Prophet* (Oxford: Oxford University Press, 2019), pp.139-40.

13) 橋本順光「アイルランド神智学徒のアジア主義? ジェイムズ・カズンズの日本滞在(1919-1920)とその余波」『アジアをめぐる比較芸術・デザイン学研究: 日英間に広がる21世紀の地平』報告書(2013), <https://hdl.handle.net/11094/76031> 及び Yorimitsu Hashimoto, "An Irish Theosophist's Pan-Asianism or Fant-asia? James Cousins and Gurcharan Singh", in Hans Martin Krämer, Julian Strube (eds.), *Theosophy across Boundaries: Transcultural and Interdisciplinary Perspectives on a Modern Esoteric Movement* (Albany: State University of New York Press, 2020) を参照。

14) 詳細は Helea Čapková, "A Brief History of the Theosophical Society in Japan in the Interwar Period", *The Journal of CESNUR*, 4 (2020) を参照。

15) 例えば、柳やリーチと親しかったグルチャラン・シンは、インドへ帰国して後は、神智学協会からは徐々に離れて行った。その伝記と事績については、橋本順光「インドの陶芸家グルチャラン・シン」1-4, 『民藝』747-750 (2015) を参照。なお、シンが設立したデリー・ブルー・トラストでは、近代インド陶芸の父となったシンについてドキュメンタリー映画を製作中であり、2023年春頃に公開予定だという。

その点で興味深いのは、久米民十郎である。第一次世界大戦のさなかにヨーロッパで学びつつ、幼いころから能に親しんだこともあってW・B・イエイツやエズラ・パウンドらと親しく交わって情報を提供し、ロンドンでは最新の渦巻派の絵画を習得し、帰国後は、神智学協会と太霊道という二つの秘教的な団体に参加して、霊媒派を名乗った画家である。1923年の関東大震災で三〇歳で逝去したため、作品数は多くないが、内外の運動と人脈を横断し、多彩な画風で興味深い事例と足跡を残したことは強調してよいだろう。

例えば1919年に、久米は、同じ神智学協会のメンバーであったジャック・プリンクリーの妹の稲・プリンクリーの肖像画を残している。この稲・プリンクリーは、つとに指摘があるように、志賀直哉が小説「大津順吉」(1912)で描いた絹ウィーラーのモデルとして知られている。稲の肖像画を含め、久米民十郎の資料は神奈川県立近代美術館に管理され、一部が公開されているが、その中に稲・プリンクリーの写真が含まれている(図1)。これという確定はむろんできないが、「大津順吉」(1912)のなかで「浪に鶴の裾模様で、袖が裾位までである着物を着た全身の写真」という絹ウィーラーの写真は、時期と内容からいって、こうした写真の一枚であったことは間違いあるまい¹⁶⁾。「大津順吉」でも、稲は男性の取り巻きに囲まれた奔放な女性として描かれているが、英国の外交官が反日英同盟の宣伝として発表した小説『キモノ』(1921)になると、いわゆる日英の「混血児」であることがことさらに誇張され、放埒なスミス八重子というキャラクターのモデルとして描かれるにまでいった¹⁷⁾。

八重子が稲のモデルであることは、当時、公然の秘密とまでいわれたが、こうした好奇心の噂がそれだけ流通したのも、西洋化という国是の帰結であった日英同盟の是非が問われ、インドの独立運動に共感し、支援していたアジア主義が盛んになった、当時の世相の一例ととらえることもできるだろう。容易に想像できるように、稲についての噂は、誇張されたものが多い。例えば長谷川時雨が『美人伝』(1918)で記すのは、ある大富豪の子息と「稲子さんの恋物語」があったものの、その子息は金子男爵の娘と結婚したというくらいである。真偽はともかく、ここで長谷川が念頭においているのは、おそらく金子堅太郎男爵の娘と清子と、川崎銀行重役の川崎肇との1911年の結婚であろう。その後、長谷川によれば、稲子は、そのことを恨むことなく、別の男性と結婚し、神戸で楽しく暮らしていると記している¹⁸⁾。なお稲の結婚については、阿川弘之が、明治の末に英国へ渡って「トーマスという実業家」と結婚したと記しており、その後、日本へは何度か来たらしく、志賀の1922年の日記から箱

16) 志賀直哉『志賀直哉全集』第2巻(岩波書店, 1999), p.175.

17) 詳しくは橋本順光「英国外交官の黄禍論小説: アシュトン=ガトキンの『キモノ』(1921)と裕仁親王の訪英」『大阪大学大学院文学研究科紀要』57(2017)を参照。

18) 長谷川時雨『美人伝』(東京社, 1918), pp.563-4.

根宮ノ下で稲・ブリンクリーに会った旨の記述を引いている¹⁹⁾。あたかも、稲に未練があってわざわざ訪日したように記しているが、稲は、1914年12月に神戸在住で日本リーバーの重役の神ヘンリー・トレヴェリアン・トーマスと婚約し、翌月には東京で結婚し、その後神戸に移り住んだという²⁰⁾。

4 久米民十郎の霊媒画 脳弓と第七官

前述の稲ブリンクリーの肖像画では、依頼ということもあったのかもしれないが、久米はその顔や着物などを写實的に描いている。一方、翌1920年に、彼は霊媒派宣言を行う。通常目では知覚できないオーラやエネルギーを、霊媒のように知覚して描くという触れ込みである。こうした久米の発想は、先に触れた神智学協会の第2代会長であるベサントが、レッドビーターと共著で刊行した『思考形態』(1905)にあり、久米の霊媒画は、そんな神智学のオーラの概念を転用した民間精神療法団体の太霊道の主張を例示するものとみなされていた²¹⁾。そんな一例である《抱擁》(図2)は、「男女の抱擁せる際に於て、寧ろ苦悶に近き恍惚の際に於ける靈的雰囲気を描出したるもの」として太霊道で紹介された²²⁾。その十字を思わせる輪郭は、永青文庫が所蔵する同時期の作品《支那の踊り》(1920)(図3)とも共通しよう。「靈」の字に「巫」が含まれるように²³⁾、靈と交感してトランス状態となった巫女を描いたと考えることもできるかもしれない。

その点で興味深いのは、久米が宣言した霊媒派の表記である。久米は、1920年9月11日付の朝日新聞に掲載した宣言で、図4の中央のように表記して「レーテルズム」とルビをふり、同じ十字型のマークを1921年にニューヨークで行った個展カタログの表紙にも使用した(図4右)。レーテルズムとは、漢字の「靈」と英語の「エーテル(ether)」を掛け合わせた久米の造語で「靈 ther(i)sm」と表記する。こうした表意文字の使用は、英国で親しくしていたエズラ・パウンドの「詩の媒体としての漢字考」(1919)を彷彿とさせるが、ここで注意したいのは、共に太霊道に参加していた高橋五郎の引用する久米の霊媒派宣伝では十

19) 阿川弘之『志賀直哉』『阿川弘之全集』第14巻(新潮社、2006)、p.130。

20) *The Japan Times*, Dec. 22, 1914, p.8の無題の記事と“A Tokyo Wedding”, *Supplement to the Japan Weekly Mail*, Jan. 16, 1915, IVを参照。さらに当時は女性の婚外子を、ことさらに問題視した事情も考慮する必要があるだろう。

21) この点については、すでに五十殿利治『久米民十郎—モダニズムの岐路に立つ「霊媒派」』(せりか書房、2022)で詳述されており、特に第3章と第4章を参照。なお以下の記述は、2022年9月10日号『図書新聞』に寄稿した同書の書評と一部重複している。

22) 伊藤延次「交霊の藝術(二)—久米民十郎氏の作品に就て—」『太霊道』1920年11月号、p.39。

23) 奇しくも同時期の英語圏では、そんな説が提唱され話題を呼んでいた。L. C. Hopkins, “The Shaman or Wu 巫: A Study in Graphic Camouflage”, *The New China Review*, 2 (1920)を参照。

字の形が異なっていることである²⁴⁾。そこでは十字ではなく、卍のような回転する形が使われており、これは宇宙の五元素を総合したエンブレムと称する太霊道の「エンマン」なのである(図4左)²⁵⁾。高橋は太霊道に深く関与していたので、太霊道にひきつけての改変という可能性があるが、これらの記号が、舞踊やそれによる忘我の状態をかたどったことは十分に考えられるのではないか。こうした霊媒画の一例について、久米は1921年に英国の記者に対して、伊藤道郎の舞踊を見ている時、「その感情が私の心の眼には表現としてはっきり見えるので、こうしたパターンが自ずと現れてくる」と述べている²⁶⁾。したがって《抱擁》や《支那の踊り》といった絵画は、こうしたレーテルズムの表記を絵解きするものとしてとらえることができるかもしれない。

すくなくとも、こうした「心の眼」で人の姿がどのように見えるのかという関心が、当時、極めて高かったことは特記しておいてよいだろう。久米も霊媒派宣言で言及しているように、つとに英国ではキルナーという医者が、化学薬品を塗布することでオーラを撮影することに成功したと称して話題になっていた²⁷⁾。1921年に、同じくロンドンで久米に取材したアメリカ人記者は、そんな当時の関心事に答え、東洋人男性が大手を振って、西洋にも東洋にもない「新しい流行」をロンドンで打ち出したことに、東洋と西洋の「雑婚」のような嫌悪感を隠せないでいる。その記者に久米は、神智学でよく使われる「アストラル体」に言及しながら、誰もがそうしたオーラのようなものを持っており、研鑽によってその人となりを示す色や形が見えるようになったと、流暢な英語で語ったのだ²⁸⁾。

それではそんなオーラを知覚できる「心の眼」とは何なのか。久米は、キルナーに触れた霊媒派宣言の末尾近くで、網膜に映らないようなオーラであっても、そのエーテルや「靈素」は「大脳の前窩体(Fornix)に感触し得る」と明言している。ここで脳の中央にある脳弓ともいう器官が言及されているのは、ブラヴァツキーの『シークレット・ドクトリン』に端を発すると言ってよいだろう。ブラヴァツキーは、当時、機能が十分に判明していなかった脳の松果体について「第三の眼(松果体)」と呼び、これが覚醒することで第三の眼が開くと述べ、「その第七感から放射される光は、無限の場を照らし出し、「過去と未来、空間と時間は消失し、現在になる」と記している²⁹⁾。この覚醒を、ヘレワード・キャリントン

24) 高橋五郎『幽明の靈的交通』(広文堂書店, 1921), p.149.

25) 『太霊道及靈子術講授録』第1輯(太霊道本院出版局, 1920), pp.58-9.

26) "Man Who Paints Soul Portraits", *Daily Mirror*, Aug 22 1921.

27) 1920年9月13日付『朝日新聞』ではキルマーとあるが、キルナーの誤植であろう。そのオーラの図を掲載したワリス著・高橋五郎訳『霊媒術講話』(大我堂, 1921), p.126によれば、1921年末に久米はその装置を持ち帰る予定だったというが、久米は個展を行うなどそのまま欧米に留まり、1923年春まで帰国することがなかった。

28) George Miller, "Artist from Japan Draws 'Soul Pictures'", *San Francisco Chronicle*, Sep. 25, 1921.

29) H. P. Blavatsky, *The Secret Doctrine: The Synthesis of Science, Religion, and Philosophy*, vol.3 (London: Theosophical Publishing House, 1897), pp.504-5.

の説明に援用し、チャクラが背骨の下から順番に開き、6番目ないし7番目に脳内にある最後のチャクラこと松果体が開くという修行の階梯に重ねたのだった。そのヨガ哲学の書は、当時よく読まれ、日本でも幸田露伴が読んで、中国の錬金術との類似性を指摘している³⁰⁾。ここでキャリントンは、ブラヴァツキーの前述の記述を引用し、左に松果体、右に脳下垂体を図示している(図5)³¹⁾。その日本への影響の一端は、例えば性相学からも明らかである。覚醒しなければ、今の生と同じかさらに下等な存在へ生まれ変わるだけだが、脳にある「第六第七官が開け初めると、総ての事が分かり初めて、段々進化が早くなって無駄をせぬようになる」というのは、通俗的な形で転用された神智学の霊的進化論の最たるものだろう³²⁾。

久米が、脳下垂体に近い脳弓を特記しているのは、松果体の延長線上にあるとあってよい。ただし、久米はそれを太霊道から転用したのではないか。というのも前述の「エンマン」を記した太霊道の解説書に、ほぼ同じ記述が見られるからである。そこでは「医学書に、フォールニックスと呼ばれ、穹窿体と訳されて居る」脳内の機能不明の器官の図が掲げられ(図6)、「太霊道に於ては、この部位は霊の発動の中枢と認るが故に、全枢と唱えて居る」のだと特筆されている³³⁾。興味深いのはその表記で、「全枢の形状はx形を為して居る所から、全xと書いて、フォールニックスと呼ばれて居る」という。「全」がWholeであることから「全x」で、「フォールニックス」と語呂合わせしているのである。この「全x」という表記は、久米の「靈ther(i)sm」と極めて似通っている。引用した『太霊道及靈子術講授録』は、1920年9月15日発行の12版であり、それ以前の版は未確認であるが、久米が太霊道から転用した可能性は否定できまい³⁴⁾。

ただし、久米のように「大脳の穹窿体(Fornix)に感触し得る」絵を描く試みは孤立したものではなかった。同じ趣向を応用したと思われるのが、第七官に響く詩を書きたいという「私」が語り手となった尾崎翠の小説『第七官界彷徨』(1931)であろう³⁵⁾。「分裂心理」を学ぶ長兄の一助、植物栽培のために肥料を研究する次兄の二助、そして音楽を学ばいとこの三五郎と同居する小野町子こと「私」の物語である。五感を連想させる名前通りに、男たち

30) 橋本順光「欧亜にまたがる露伴:幸田露伴の参照した英文資料とその転用」『大阪大学大学院文学研究科紀要』59(2019)を参照。

31) Hereward Carrington, *Higher Psychological Development (Yoga Philosophy): An Outline of the Secret Hindu Teachings* (New York: Dodd, Mead, 1920), p.201.

32) 石竜子『性相学より観たる能率増進』(通信協会東京支部, 1923), pp.69-70

33) 田中守平『太霊道及靈子術講授録』第2輯(太霊道本院出版局, 1920), p.42-3.

34) その点で太霊道のゴーストライターとして働いていたという栗田仙堂が、『リズム哲学の精華』(1924)で、霊能力や治病能力の発現を「小脳第三室(フォールニックス)」によって説明しているのは、以前から栗田が脳弓に注目していた傍証になるだろう。栗田英彦、塚田穂高、吉永進一『近現代日本の民間精神療法—不可視なエネルギーの諸相』(国書刊行会, 2019), pp.346-7.

35) 骨相学や心霊学での言及を挙げ、「第七官」が五感の進化として考えられていた可能性を指摘した先駆的な研究としては、石原深予『尾崎翠の詩と病理』(ピング・ネット・プレス, 2015), p.103を参照のこと。

の探求はそれぞれ視覚、嗅覚、聴覚を中心としており、そこから「私」は五感が離合集散して機能するさまを経験する。尾崎の作品ではしばしば匂いが重要な主題として描かれるが、二助の部屋から漂う肥やしのおいが三五郎のピアノの哀しさをいっそう哀しくしたと記す箇所は注目に値しよう。「音楽と臭気とは私に思わせた。第七官というのは、二つ以上の感覚がかさなってよびおこすこの哀感ではないか」と語るのは、共感覚的な知覚が従来の五感を総合する可能性を示唆するものであろう³⁶⁾。ただし、小説では第七官そのものの探求は横滑りするように回避され、題名通りに彷徨に力点が置かれる。『シークレット・ドクトリン』に始まり、神智学と太霊道のあいだで交錯していった第七官について、尾崎の小説は独自の受容と展開を示すものとして特記してよいだろう。

5 ドロシー・ホジソン 新しい女とバハイの交錯

冒頭で引用した秋田雨雀の「颱風前後」(1919)は、エロシェンコの登場後、彼との噂が流れていたという神山愛子を、太田が訪ねる場面へと変わる。神山という名前と「自由思想家の恋人」という設定からもうかがえるように、彼女は1916年11月に起きたいわゆる日蔭茶屋事件において、大杉栄を刺傷した咎で収監されていた神近市子をモデルとしている。この戯曲で太田が「ミス、ハヂソン」と横浜の神山を訪ねたというのは³⁷⁾、実際に作者の秋田が根岸の監獄に神近を訪ねたことに取材している。その日記によれば、1916年12月21日のこと、秋田はリシャル家に行って「ハヂソン嬢」を迎えに行き、そこから根岸の監獄に向かって神近に面会したのだという³⁸⁾。

秋田の日記には、バハイ教の会合に関連してこの「ハヂソン」がしばしば登場している。彼女は、ポール・リシャルとミラ・リシャル夫妻の英語の通訳として働いていたドロシー・ホジソンという。ポール・リシャルは黒龍会と近く、反英的な言動で知られていたため、前述のシャストリは、リシャル夫妻とホジソンも要注意人物とみなし、その言動について英国当局へ報告を送っていた。その報告によると、ホジソンはパリでバハイ教の会合があった時に、リシャルと知り合いになり、そのまま彼らに同行するようになったのだという。シャストリによれば、ホジソンは英国人であるにもかかわらず、ポール・リシャルの英国への侮辱的な批判に同調するような「単純な人間」として酷評されている³⁹⁾。

なるほど、シャストリが警戒していたように、バハイ教の会合は、時にアジア主義者がま

36) 稲垣真美編『定本尾崎翠全集』上巻(筑摩書房、1998)、p.293.

37) 秋田雨雀『仏陀と幼児の死』、p.70.

38) 尾崎宏次編『秋田雨雀日記』第1巻(未来社、1965)、p.82.

39) FO 371/3068, "Secret. Report by Agent P. August 28, 1917."

ぎれこむ場となっていた。例えば、このホジソンが1916年に初めて来日した際、日本で長くバハイ教の流布に従事していたアグネス・アレクサンダーは、この旧知の友人を迎えに神戸へ向かったという。そこでアレクサンダーは、英語が堪能な神戸の僧侶の井上大雲と親しくなり、それが縁で井上は熱心なバハイの紹介者となる⁴⁰⁾。同じ神戸についていえば、バハイ教の会合が1920年10月18日に三宮で開かれた時、秋田も東京から参加し、そこで箱木一郎を知ったという記載がある⁴¹⁾。バハイ教がきっかけで知り合ったのかどうかは不明ながら、箱木と井上は、それから約2年後、仏教団体の設立を企図することになる。1923年1月25日、ボースほかインドの革命家と通じ、その名も汎亜細亜仏教同盟会を設立しようとしたのである⁴²⁾。その際に、井上らは、シャストリがおそらくは内偵目的で参加していた上海亜細亜協会と大同団結を画策していたのだった。計画は頓挫したと思われるが、同様のアジア主義を掲げる会議は、1926年に長崎で、翌年には上海で開催されることになる。

たしかに、エスペラントに比べれば、日本では十分な広がりをもつことはなかったが、バハイもまた、多様な思惑の人々をひきつけたことはもっと注目されてよいだろう。アメリカ人女性であるアグネス・アレクサンダーが中心に活動したこともあり、神近市子は英語の修練が主な目的であったといわれ⁴³⁾、熱心だった望月百合子も次第に距離をおいていったが⁴⁴⁾、先進的な女性が集まる場であったことも特筆しなければなるまい。

このように1920年代の東京では、ことエスペラント、バハイ、神智学のネットワークをみるだけでも、そこでは国際主義とアジア主義が交錯し、相異なった思惑を持った人々が離合集散しながら、時に触媒作用や化学反応のように意外な副産物を生み出していたことがわかる。第一次世界大戦の引き金となった愛国主義への反省から、各民族ないし各宗教の相互理解を理想とする国際的な団体が日本にネットワークを拡大していったが、アジア主義的な拡大を図る日本の団体も、拡大のための奇貨としてそのネットワークに参加するところがあった。エスペラントは、植民地主義を回避できる方途として移入されたが、その人脈と主張がしばしば重なり合ったバハイ教においては、アジア主義の隠れ蓑として機能した可能性が明らかとなった。神智学協会は、しばしばインドの独立運動のダミーとなり、そのオカルティズムの体系は太霊道に転用されたが、画家の久米民十郎は、両者の人脈と知見を巧みに利用し、霊媒画や霊媒派の宣言を展開していった例として特筆すべき存在といえるだろう。

40) Agnes Baldwin Alexander, *History of the Bahá'í Faith in Japan 1914-1938* (Tokyo: Bahá'í Publishing Trust of Japan, 1977), p.20.

41) 『秋田雨雀日記』第1巻(未来社, 1965), p.230, ほかにも p.339 を参照。

42) JACAR (アジア歴史資料センター) Ref.B12081587100、16. 汎亜細亜仏教同盟会設立ニ関スル件 (B-3-10-1-8_005) (外務省外交史料館)。

43) 平林たい子「エロシエンコ」『平林たい子全集』第11巻(潮出版社, 1979), p.380.

44) 望月はアナキズムとしての側面に惹かれたため、宗教的になってきたバハイ教からは離れたと語ったという。森まゆみ『断髪のコギャル』(文藝春秋, 2008), p.13.

こうした意図的な攪乱や転用の一方で、ホジソンのように、本人の意図しないところで、バハイ教のネットワークからアジア主義的な運動が展開していった一種の触媒作用も無視できない。エロシェンコが存在が、ヨーロッパとアジアのあいだで揺れ動く不安定な国家という点で、ロシアと日本が重なることを秋田雨雀に気づかせたように、エスペラント、バハイ、そしてアジア主義のネットワークを無数につなぎ記録した秋田の事績もまた、今後、さらなる研究とその示唆を与えることになるだろう。

大英図書館所蔵の「中央情報局長週報」にみる孫文面会の記録の原文とその邦訳

Weekly Report of the Director, Central Intelligence, Dated Simla, the 21st September 1918. (請求番号 : IOR. POS. 10515)

Dr. Sun Yat Sen. — An Indian who recently visited Sun Yat Sen gives the following account of his conversation with him:

"I succeeded in interviewing the abovenamed[sic] twice at his house. He is a very courteous gentleman without any air of superiority and one who talks with him feels the influence of his personality. He asked me about the revolutionary movement in India. I told him that there was not much work being done outwardly though at heart almost all the educated men were more or less dissatisfied. He has great hopes in the success of an Indian Revolution and says that great forces are working out of India. He admires the Indians in Germany and has a high opinion of them. He says that China was not justified in joining the war, as the war is not being fought to preserve democracy in the world. Great Britain in his opinion represents a great despotic power tyrannizing over Asia, and for the democracy of the world the destruction of the British Empire is essential. He says that he has no German friends nor does he speak the German language, yet he holds that England is no less to blame than Germany. America has joined in the Titanic struggle to save the British Empire from destruction and the motives of President Wilson are not what he outwardly declares.

"The British Government regards him (Dr. Sun Yet Sen) as their bitter enemy, because he stands for the freedom of India, and they are trying to attack his character in their own defence.

"Then he asked me as to the real name of the Indian* who was living in hiding in Japan for whom he has much respect and whom he thinks to be a wonderful organizer. He is much puzzled to understand how that man managed to come to Japan. He says that the man is still doing a lot in and from Japan, and, if he remains there two or three years more as he is now, he will create insurmountable difficulties in the way of the British Government. He felt very much pleased when I said that I knew the man and talked a lot about his career in India. It seems Dr. Sun has seen Thakur in Japan, though he has not told me so. He says that the man is very strong in Japan and his influence giving encouragement to anti-British feelings in that country was extending. *Rash Bihari Bose.

"When asked about the aggressiveness of Japan in the Far East, he burst out 'Europe is dominating the world, why should not Japan expand?'

“He holds that a successful revolution in China will affect India immensely and so the British do not wish that a revolution be successful in China. He advises me to go to Switzerland and work there for India, where there is a powerful secret movement against the British. It seems that his party and himself are ready to do what they can by way of helping India in regaining her freedom. He also remarked that after the war the friendship between England and Japan will undergo a change which the British may not like.

“When visited the second time I found him lying in bed in high fever. Still he received me kindly and talked about fifteen minutes advising me not to see him in daytime as the British would suspect me. He asks me to see him every now and then for exchange of views.”

The following is an account of further conversation between the same Indian and Sun Yat Sen: —

“He says that he has been co-operating with the Indian revolutionaries for the last ten years, that is, since the shooting of Sir Curzon Wylie by Dhingra in London.

“He is of opinion that there is not much chance of sending any help to India through Yunnan, but there is a great chance to smuggle arms through the Afghan frontier, where troubles are likely to break out by the end of this year.

“He blames the British for making Japan so strong that now she is a great peril to China,” and he knows that there are some serious people in Japan who want to see trouble in India. The nation of Japan is in favour of helping Indians to regain independence and much valuable work in this direction has been done by Thakur, who is still doing much. He knows Okawa but does not value the man much.

“He advises me to rouse the feelings of America through my writings against Japan, so that Japan may become reasonable. At present the Japanese are very proud and ambitious and their gradual control of China will mean the control of the Pacific by Japan. This will cause loss of balance of power among the nations. It is therefore necessary that the Japanese aggression in China should be checked immediately. He also thinks that the Japanese will employ German experts for developing the mind of China.

“As to India, he says that the things should be started as soon as possible, as this is the best opportunity.

“In spite of my difference of opinion I am struck with the personality of this man. He is simple, genuine and unselfish.”

「中央情報局長週報」(1918年9月21日付シムラ発)

孫文博士—最近、孫文を訪問したインド人が、彼との会話について以下のように報告している。

「彼の家で2回、上記の人物にインタビューすることに成功した。彼はとても礼儀正しい紳士で、偉ぶったところがなく、話すうちに誰もがその人柄に感化されるだろう。私には、インドの革命運動についてどう思うか聞いてきた。私は、大したことは起こっていないように表面上は見えるが、教育を受けた人間はみな心の中では多かれ少なかれ不満を抱いている、と述べた。彼はインド革命の成功に大きな希望を抱いており、それだけの大きな影響力がインドにはあるという。彼はドイツのインド人を賞賛し、高く評価している。彼によれば、中国の戦争への参加は正当化できない、なぜならこの戦争は世界の民主主義を守るために行われてはいないからだ、という。英国はアジアを横暴に支配する専制国家であり、世界の民主主義のためには大英帝国の滅亡が不可欠であるというのが彼の持論である。彼は、ドイツ人の友人はいないし、ドイツ語も話せないというものの、英国はドイツに劣らず非難されるべきであると考えている。アメリカは、大英帝国を崩壊から救うために、大国の闘いに参加したのであり、ウィルソン大統領の動機は、彼が表立って宣言しているようなものではないのだという。

「英国政府は、彼(孫文博士)を、インドの解放を支持していることから、自分たちの仇敵とみなしており、自分たちの保身のために、彼の人格を攻撃しようとしているのだという。

「彼は日本に潜伏している例のインド人*について、その実名を私に聞いてきた。彼はそのインド人を尊敬しており、素晴らしいオーガナイザーとみなしていて、どうやって日本に来たのか、とても不思議に思っていた。このインド人は日本に居ながらにして多くのことを行っており、あと2、3年、今のまま滞在すれば、英国政府の邪魔になるような、甚大な局面を引き起こすだろうと述べている。私がこの人を知っていると行って、インドでの経歴をいろいろ話すと、彼はとても喜んでくれた。孫博士は、私には黙っていたが、このタケールという男に会ったことがあるようだ。このインド人は日本で大変な影響力をもっており、日本での反英感情をいっそう刺激しつつあるという。*ラス・ビハリ・ボースのこと。

「極東において日本が攻撃的であることについて尋ねると、彼は「ヨーロッパが世界を支配しているのだから、日本が拡大するのも当然ではないか」と声を張り上げた。

「中国で革命が成功すればインドに甚大な影響を与えるので、英国は革命の成功を望んでいない」と彼は考えている。彼は私に、スイスでは反英秘密運動が強いので、そこに行ってインドのために働くよう助言した。彼の党も彼自身も、インドが自由を取り戻すのを手助けするために、できる限りのことをする用意があるようだ。また、「大戦後、日英の友好関係は、英国の望まない方向へ変化するだろう」とも述べた。

「2回目の訪問の時、彼は高熱でベッドで横たわっていた。それでも彼は私を親切に迎え、

15分ほど話をして、英国人に疑われるから昼間は会わないほうがいいと忠告してくれた。彼は時々会って意見交換をすることを求めてきた。」

以下は、同じインド人と孫文のさらなる会話についての記述である。

「彼はここ10年間、つまりロンドンでディングラがサー・カーゾン・ワイリーを狙撃して以来、インドの革命家たちと協力してきたという。

「雲南経由でインドに援助物資を送るのは無理だが、アフガン国境から武器を密輸することは十分に可能であり、この地域は今年の末までに紛争が勃発するだろう」という。

「日本を強くして、今や中国の大きな脅威にまでなったのは英国のせいだと非難する一方、日本にはインドで騒擾が起こるのを望む真面目な人がいることも彼は知っている。日本はインドの独立回復に賛成しており、そうなるよう貢献したのはタクルの働きが大きく、今も多くの影響を及ぼしている。彼は大川をよく知っているが、あまり評価はしていない。

「彼は私に、日本を批判する著作によってアメリカの感情を扇動するよう助言し、そうすれば日本が理性的になるかもしれないという。現在、日本人は非常に傲慢で野心的であり、中国を徐々に支配することは、日本が太平洋を支配することを意味するという。これは、国家間の力の均衡を失わせることになる。したがって、中国における日本の侵略を直ちに阻止することが必要となる。また、日本はドイツの専門家を雇って、中国の民心を誘導することになるだろうとも考えている。

「インドについては、今が絶好の機会なのだから、できるだけ早く着手すべきだと述べている。

「意見の相違はあるものの、私はこの男の人柄に心を打たれた。彼は飾らない、偽るところもない、無私無欲の人である。」

H・P・シャストリによる孫文逝去にともなう回顧記事の原文とその邦訳

H. P. Shastri, "My First Meeting with Dr. Sun Yat-sen", *The China Weekly Review*; Shanghai. 21 Mar 1925, p.77.

My First Meeting with Dr. Sun Yat-sen

WHEN I came to China from Japan in 1918, I found Dr. Sun living in his little house in the French concession of Shanghai, and one Sunday morning I went to meet him with a Japanese journalist. I had hardly waited ten minutes in the small drawing room when Dr. Sun came down, dressed in a simple Chinese coat and shaking hands with me asked about the health of Mr. Mitsuru Toyama and his other friends in Japan. He spoke with some excitement of the Bolshevik revolution in Russia and asked whether Japan was going to recognize Soviet Russia soon. He remarked that what was most necessary that Japan should recognize the new People's government in Russia. He further asked many questions about the progress of events in India and there was a note of true sympathy in his tone. In the first interview I had with this great Chinese, I was convinced of his frankness, sincerity, and sympathy with the oppressed. He invited me to see him as often as I could, and after a few more meetings our acquaintance ripened into friendship.

Dr. Sun did not like the Japanese interference in the domestic matters of China. For several months I conveyed his messages to our mutual friends in Japan and vice versa. Dr. Sun insisted that Japan must leave Manchuria alone to show her sincerity. He was a great admirer of the late Prince Katsura whom he considered to be the greatest statesman of modern Japan. Dr. Sun discarded sentimentalism in politics and loved truth more than any other thing.

I introduced Sir Vithaldas Thakarse, president of the Bank of Bombay to Dr. Sun and on hearing Dr. Sun's views on internationalism, and seeing his unselfish zeal for the political deliverance of the nations of Asia, Sir Vithaldas told me that he considered Dr. Sun to be one of the greatest statesmen of the world.

Dr. Sun was a great admirer of Mahatma Gandhi and though he did not agree with the Mahatma in his non-cooperation movement, he always paid a very high tribute to the saintly character of Gandhi.

It is a mistake to think that Dr. Sun was anti-British. He loved the British people among whom he had many bosom friends. But he did not like the foreign policy of Britain in the Far East.

Dr. Sun was an advocate of Asian independence without the guidance of Japan. He thought of unification of the Moslem and Buddhist Asia on cultural lines and had friends in Turkey, Persia, India, Afghanistan.

I found a true democrat in Dr. Sun. He was not only an idealist democrat but also a practical democrat. He preferred to work with the people as one of them and took special care to eliminate obstacles to democracy. He was totally free from pride, conceit, and self-importance. He gave full consideration to the opinions of those who differed from him, and I never found him sarcastic or out of temper during my long associations with him. Once when I went to see him I found him confined to bed. He called me to his bed room and said: "I have a high fever, but I do not want you to have the impression that I did not wish to receive you for want of time."

Dr. Sun was not only a statesman, but also a deep thinker. He often compared the philosophers of the Sung dynasty to the Indian Vedantists and himself valued the philosophy of Wang Yan Ming of the Ming dynasty. Though not formally religious Dr. Sun had faith in the immortality of the soul, and thought that the best service to God was to serve His children.

Dr. Sun had studied the question of the origin of the Japanese race and once gave me an outline of his opinion on the subject. According to Dr. Sun the Japanese are of the Persian race. He thought that Jemu Tenno, the first Emperor of Japan was a Persian Prince who migrated to Japan after the fall of Persia.

Dr. Sun was a great conversationalist and always talked with animation. He was not at all humorous.

Though a socialist Dr. Sun was not a Bolshevik and on several occasions he told me that communism could not be applied to China. He was a friend of Russia and admired Lenin.

Dr. Sun lived a simple life, abstaining from tobacco and wine. He was not fond of outdoor life and read whenever he had time to do so. I found him kind, at times very tender, affectionate, and considerate. There is no doubt that he will pass into history as one of the greatest statesmen who cared for the good of the peoples and thus sacrificed every thing for the good of humanity. I never heard Dr. Sun mention the word money but he was always ready to help his friends in any way in his power.

Shanghai, March 14, 1925.

H. P. Shastri

孫文博士との最初の出会い

1918年に日本から中国へ渡ってきた時、孫博士は上海のフランス租界にある小さな家に住んでいた。ある日曜日の朝、私は日本人ジャーナリストと一緒に孫博士に会いに行った。小さな居間で待っていると10分もしないうちに、質素な中国服に身を包んだ博士が降りてきて私に握手し、頭山満氏や日本の友人について変わりが無いかどうか尋ねた。そして、ロシアのボルシェビキ革命のことを興奮気味に話し、まもなく日本もソビエト政府を認めるつもりかと聞いてきた。ロシアの新しい人民政府を承認することは日本にとって最も必要と述べたのである。さらに、インドでの事態の進展について多々の質問があったが、その口調には真に同情が感じられた。こうして偉大な中国人との最初の面談で、私は率直さ、誠実さ、そして抑圧された人々への共感を確信した。孫博士は、できるだけ頻繁に会おうと私に言ってくれて、何回か会ううちに、私たちの友情は育まれていった。

孫氏は日本が中国の内政に干渉することを快く思っていなかった。私は数ヶ月の間、孫氏の伝言を日本の共通の友人に伝え、逆に日本の友人から孫博士に伝えた。孫氏は、日本が誠意を示すためには満州から手を引かなければならないと主張していた。彼は、近代日本の最も偉大な政治家である故桂太郎を尊敬していた。孫氏は、政治においては感情論を排し、何よりも真理を重んじた。

私はボンベイ銀行頭取のヴィタルダス・タカージー卿を孫博士に紹介した。ヴィタルダス卿は、孫博士の国際主義に対する見解を聞き、アジア諸国の政治的解放のための無私の熱意に打たれ、孫博士を世界最大の政治家の一人と考えていると私に言った。

孫氏はマハトマ・ガンディーを大変尊敬しており、非協力運動には賛同しなかったものの、ガンディーの聖人的性格には常に最高の賛辞を惜しまなかった。

孫氏を反英国的であったとみなすのは間違いである。彼は英国人を愛し、その中には心からの友も数多くいた。ただし、極東における英国の外交政策には反対していた。

孫氏は、日本の指導に頼らない形でのアジア独立が持論だった。トルコ、ペルシャ、インド、アフガニスタンに友人を持ち、文化的な面でイスラム教徒と仏教徒のアジア統一を考えていた。

私は孫氏に、真の民主主義者を見出した。彼は理想主義的な民主主義者であるばかりでなく、実務的な民主主義者でもあった。彼は、人民の一員として人民とともに働くことを好み、民主主義を阻害するものを排除するために細心の注意を払った。慢心、驕り、自己中心的なところは全くなく、自分と意見が異なる人にも十分に配慮していた。長い付き合いの中で、孫博士が嫌味を言ったり、短気になったりしたことは一度もなかった。孫博士に会いに行ったとき、床から出られない状態だったことが一度だけある。彼は寝室に私を呼んで、「高い熱が出ているのですが、時間がないから会いたくないと思われては困りますので」と口にした。

孫氏は政治家であるだけでなく、深遠な思想家でもあった。宋代の哲学者をしばしばインドのヴェーダンタ哲学者と比較し、明代の王陽明の哲学を高く評価していた。公の場では宗教から距離を置いていたが、孫氏は魂の不滅を信じ、神への最高の奉仕は神の子らに仕えることだと考えていた。

孫氏は日本民族の起源について調べたことがあって、あるとき私にその概略を話してくれたことがある。孫氏によれば、日本人はペルシャ民族だという。初代天皇の神武はペルシャの王子で、ペルシャが滅んだ後、日本に渡ってきたというのである。

孫氏は話が上手で、いつも生き生きと話していた。おどけたところは全くなかった。

社会主義者ではあったが、ボルシェビキではなく、共産主義は中国には適用できないと、何度か私に言ったことがある。彼はロシアを友とし、レーニンを尊敬していた。

孫氏は、タバコと酒を遠ざけ、質素な生活を送っていた。屋外で活動するのが好まず、いつもひまさえあれば本を開いていた。親切だけでなく、時にとても優しく、愛情深く、思いやりのある人だと私は思う。人民のために気を配り、人類のためにあらゆるものを犠牲にした偉大な政治家の一人として、孫博士が歴史に名を残すことは間違いないだろう。彼の口から金という言葉聞いたことがないが、自分の力の及ぶ限り、友人を助けるよう常につとめていた。

1925年3月14日 上海

H・P・シャストリ

解題

ここに復刻したのは、英国のエージェントH・P・シャストリが、1918年4月に長崎経由で上海に渡った後、孫文に面会して当局に送ったと思われる報告と、1925年の孫文の死に際してシャストリ自身が記した孫文面会についての回顧記事である。シャストリが上海から送った報告書そのものはまだ見つけられていないが、前掲の拙稿で詳述したように、東京同様に上海でも英国政府のために諜報活動を行っていたことはまず確実だと考えられる。前者は、英領インドの中央情報局に集積されたアジアにおける諜報報告をまとめた1918年の週報であり、後者は、シャストリがしばしば寄稿した1925年の雑誌記事だが、後述する共通点から、週報の元となった報告は、シャストリである可能性が高いと判断した。

第一に、孫文に面会した際に、東京にいる共通の知人が話題になっていたことが挙げられる。記事では頭山満に言及があるが、週報ではR・B・ボースとなっており、大川周明の名も挙がっている。しかも、週報には、エージェントが「インド人」であったことが明記されている。1918年の段階で、この3人と面識があり、東京から上海へ移動したインド人となると、シャストリをおいていないといつてよいだろう。第二に、孫文が高熱で床にあった時も面会を断らなかったことと、第三に、政治的な立場はともかく、人をひきつけ、かつ高潔だった人格を特記していることも共通している。

実際には週報に記されたような面会だったところを、記事のように回顧したとすれば、英国政府のための諜報であった前者に対して、後者は広報活動の一貫だった可能性が浮上してくる。週報で報告された孫文は、反英的かつ親独的であったという。日本の中国支配を憂慮する一方、インドの独立運動を支援することで英国の力を削がねばならないと孫文が考えていたというのは、英国として看過できなかったはずだ。それが日英同盟解消後に書かれた回顧記事での孫文は、極東政策にこそ批判的ではあっても、反英ではないことが強調され、ガンディーについても個人的な尊敬を示すにとどまり、政治的な立場の相違が示唆されている。

アジア主義について、シャストリは文化的な側面を強調することにより、アジア主義に共感する人々を扇動することなく、彼らに近づき、動向を報告していた可能性が高い。記事でも仏教徒とイスラム教徒が連帯するという非政治的な側面が強調され、週報と違って、共産主義は中国には不向きだとしてソヴィエトとの連携も否定されている。そのように考えれば、やや唐突に記された神武天皇はペルシャ人であり、つまり日本人はアーリア系だという孫文の持論への言及も、実際に孫文が提唱していたかどうかはともかく、人種的なアジア主義の宣伝に孫文が担ぎ出されないようにする布石と解釈できるだろう。実際、記事の翌1926年10月には、1924年に制定されたアメリカでのいわゆる排日移民法に対抗して、長崎で全亜細亜民族会議が開催されるので、孫文が日本人をペルシャ系ことアーリア系とみなしていたというのは、人種対立の言説に水を差すものだったと考えられる。

なお、日本人ペルシャ系説をもし孫文が提唱していたとするなら、時期から考えて、それは当時有名だった中国学者のジョゼフ・エドキンズか⁴⁵⁾、エドキンズを援用したF・ブリンクリーの著作から着想したと考えられる。ただ、エドキンズはアマテラスがペルシャのミトラ神と酷似していると述べるにとどまっておらず、直接、エドキンズに言及せずに中国研究の大家の説の応用として、神武天皇の先祖はペルシャに起源があるかもしれないと述べたのはブリンクリーである⁴⁶⁾。とはいえ、この説は、極東の民族を聖書という既知の体系に組み込む点で、それ自体は西洋において珍しいことではなく、さかのほればケンペルもペルシャ起源説を主張していた⁴⁷⁾。したがって同様の西方起源説は中国民族についても提唱されており、例えば同時代には中国のバビロン起源説を展開したテリアン・ド・ラクーペリーがよく知られていた。日本人をアリア系とする言説は、「一等国」日本というナショナリズムとも共鳴していたので、シャストリは、そんな日本側の事情も見越してこの説に言及したと考えられよう。

45) J. Edkins, "Persian Elements in Japanese Legends", *Transactions of the Asiatic Society of Japan*, 16 (1889), p.1.

46) F. Brinkley, *Japan, Its History, Arts, and Literature*, vol.5, (Boston: J.B. Millet, 1901), p.111. このフランス・ブリンクリーは、ジャックや稲の父で、このように日本政府の対外宣伝の書物や新聞によく協力したことで知られ、そのせいもあって、稲が『キモノ』での反日英同盟の宣伝に使われたと考えられる。

47) 例えば、このケンペル説を紹介した文献のなかで注目すべき一例が、Sir Edward James Reed, *Japan: Its History, Traditions, and Religions*, vol.1 (London: John Murray, 1880), p.15である。リードは海軍の技師であり、ブリンクリー同様に、日本に便宜を図るよう巨額な費用を与えられていた。本書もリードの主張や持論というよりも、日本の文明化を宣伝し紹介する色彩が極めて強く、ペルシャ起源も日本人がほかのアジアの民族と異なり、西洋起源であることを示唆するためだった可能性が高い。そんなリードの招致と「買収」については、大谷正『近代日本の対外宣伝』(研文出版, 1994), p.54などを参照。



図 1



図 2



図 3

宇宙に在りて靈性靈能は經驗交乘繼
 変成全宇宙の形理律に據りて發動する
 ものなることを意識す。

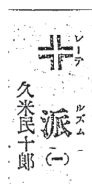


図 4

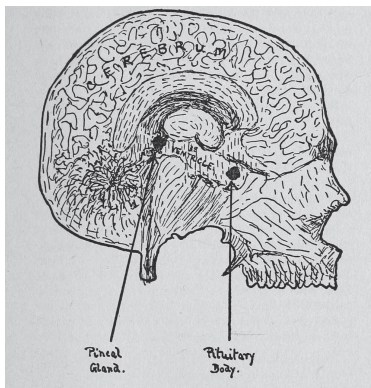


図 5

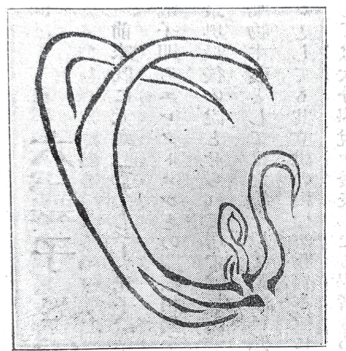


図 6

圖全×全

The Intersection of Internationalism and Pan-Asianism in Tokyo in the 1920s:
 Esperanto, Theosophy, Baha'i Faith
 Appendix, British Agent H. P. Shastri's Intelligence Report on Sun Yat-sen (1918)

Yorimitsu HASHIMOTO

During World War I, religious or secular organizations, seeking to promote global mutual respect in reaction to jingoism, tried to widen their networks to Japan. Meanwhile, in Japan, which had not suffered serious war damage, the relative decline of Europe's presence led to the popularity of Pan-Asianism, in which the East stood in solidarity against the West. This article argues how the Esperanto, Baha'i, and Theosophical networks in 1920s Tokyo brought together people with different backgrounds and intentions and yielded unexpected byproducts. All three networks held the ideal of unity among humanity, but in general, Esperantists and Baha'i practitioners had a strong affinity with socialism, while Theosophical society sometimes harbored Indian independence activists. The painter Tamijuro Koume is the best example of a well-known artist who made the most of the intersection of internationalism and Pan-Asianism. In 1920, he combined the Chinese character 靈 [Rei], which means "spirit," with "ether" to coin the word "靈 therism," or Reitherism, possibly echoing his friend Ezra Pound's idea in "The Chinese Written Character as a Medium for Poetry" (1919). Koume's statement that auras can be seen by the fornix in the brain upon spiritual awakening is likely to have been inspired by Blavatsky's *Secret Doctrine* (1888) or related books. At the same time, Koume was deeply involved in the Taireido psychotherapy group, which appropriated a part of the Theosophical framework on the foundation of Pan-Asianism. In Taireido around 1916, the combination of the Chinese character 全 [whole] and "X" was used to represent that the fornix was "全 X" [whole-x], which could be compared to Koume's "靈 therism." Alarmed by the threat of these international networks, British authorities hired several agents to investigate them. One agent, H.P. Shastri, was alerted to anti-British individuals Paul Richard, Mirra Richard [Alfassa], and their interpreter Dorothy Hodgson, who were close to Baha'i practitioners and Theosophists. Crosschecking Shastri's intelligence reports with Japanese records reveals their complex relations and influences. An appendix to this paper reprints the original transcript of a supposed

meeting between Shastri and Sun Yat-sen in 1918, after Shastri had moved to Shanghai.